

第70回記念日本アンデパンダン展
 国立新美術館
 3・22(水)~4・3(月) 10時~18時
 <休館日3・28(火)> 初日正午から、最終日は14時終了

第70回記念 日本アンデパンダン展

EVENT GUIDE



69回展の公開創作研究会

●第70回記念特別企画展示

「春を待ち、闘った、激動の60年代美術一展」

60点を超える作品と画像資料で蘇る60年代
 そこには経済構造の歴史的な転換期と生活、家族、愛、ベトナム戦争、原水爆禁止運動、開発で侵される地方文化、民族的民主的闘いの狭間で、春を待つ人々の平和への渴望が在った。

●日本アンデパンダン展・日本美術会の歴史展示

貴重な資料と画像による70年の歴史展示、DVD映像は必見。

●70周年記念誌

50周年以降の作品375点を収録。
 論文、あゆみ、年表を加えての
 記念誌を発行。頒布価格2000円

アートフォーラム

開場 12:30 開会 13:00
 資料代 500円 定員 200名

3/26(日) 美術館 3F 講堂

<アンデパンダン展の創造>

「戦争体験を告発する絵画」

講師 山田諭氏 (名古屋市美術館・学芸員)

「再考：1950年代の絵画表現—共同性と個のはざままで」

講師 小沢節子氏 (早稲田大学)

— 昨年「アンデパンダン展の源流」、昨年「アンデパンダン展の原点」に次ぐ第三弾！「アンデパンダン展の創造」では1950年代の作家に焦点を当て、絵を描くことが持った可能性を探る中からアンデパンダンの今後を示唆する。(講演の内容紹介は裏面参照)

出品者のつどい

出品者のみなさん！出品者同士がお互い知り合い、親しく会話して交流できる企画です。気軽にご参加下さい。

3/25(土) 15:00-

美術館 3F 講堂

参加費 500円
 (1F事務支所でお支払い下さい)

公開創作研究会

二日間にわたり対象作家の作品について研究討議をします。明日の創作のヒントになると毎年大好評。どなたも自由に参加できます。

3/29(水) 14:00—対象作家 菱千代子(油彩) 根岸君夫(油彩)

3/30(木) 14:00—対象作家 渡辺 稔子(インスタ) 宮本和郎(日本画)

各種合評会

会期中さまざまな合評会が予定されています。ぜひ参加して創作の糧にしましょう。集合場所は会場入り口に掲示します。

- 初出品者交流合評会 3/25(土) 10:00—
- ジャンル別合評会 3/27(月) 14:00—
- 油彩の合評会 4/1(土) 14:00—
- 青年合評会 4/1(土) 16:00—

アンデパンダンの日 ギャラリーツアー

アンデパンダンの日は出品者と鑑賞者がともにアンデパンダン展を創る日です。ギャラリーツアーは出品者が自分の作品やほかの作品をご案内します。作品制作の苦労や鑑賞の在り方などともに交流し合ひましょう。

4/2(日)

午前の部
 10時~12時頃
 午後の部
 14時~16時頃

他にも、ポストカード海外作品展示
 東日本大震災復興支援チャリティ
 メッセージはがき等

戦争体験を告発する絵画

山田 諭氏

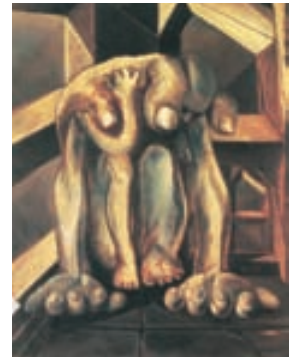
戦後 70 年の夏 (2015 年)、不幸にも戦争という時代を生きなければならなかった画家たちの足跡を残された作品を通して辿ることで、戦争を生きぬくことについて考えるために、特別展「画家たちと戦争：彼らはいかにして生きぬいたのか」を企画・開催した。

日本の近代美術を代表する画家たち (横山大観、藤田嗣治、北川民次、岡鹿之助、北脇昇、松本竣介など) の創作活動において、日中戦争の勃発からポツダム宣言の受諾までの 8 年間に戦中期と設定して、その前後の戦前期と戦後期における作品の展開 (持続と変化) を確認することで、個々の具体的な事例として、画家としての生き方を感じるとともに考えてもらうことを意図したのである。

この展覧会では、これまで顧みられなかった戦中期の作品 (とくに戦争画) をクローズアップして展示した。軍部委嘱による勝利の「作戦記録画」から、戦局の悪化に伴って、単なる記録を超えて感情に訴えかける「戦意高揚のための絵画」へと変貌した戦争画を描いたのか、描かなかったのか。画家の戦争責任に直結する戦争画の問題は、終戦直後の一時期を除くと、戦後 70 年間、意識的あるいは無意識的に忌避されてきた。しかし、「戦意高揚のための絵画」という制作動機と画題だけで区別するのではなく、何らかのかたち (例えば戦闘機の献金や傷病兵の見舞い) での「戦争協力のための絵画」と解釈するならば、戦中期に制作された作品は、すべてが戦争画となる。戦争協力をする (戦争画を描く) ことなく、戦争を生きぬくことのできた画家は一人としていなかったのである。

このような意味において、戦争画の問題は、実は戦中期にではなく、戦後期にある。戦後を迎えて、「聖戦」の隠された真実を知って、心の奥底に刻印された痛恨の戦争体験を抱きながら、「戦争協力のための絵画」ではなく、「戦争体験を告発する絵画」としての戦争画を描いたのか、描かなかったのか。

激動の戦後社会において、自己の戦争体験を告発した稀有な作品 (鶴岡政男《重い手》、北脇昇《クオ・ヴァディス》、井上長三郎《葬送曲》、中村宏《砂川五番》など) の意義について考察する。



鶴岡政男「重い手」1949年



北脇昇「クオ・ヴァディス」1949年

再考：1950年代の絵画表現—共同性と個のはざままで

小沢節子氏

近年、歴史学、社会学、文学といった領域を横断して、1940年代後半の占領期から朝鮮戦争、講和と独立後の時代の社会と文化運動をめぐる「50年代研究」が活性化している。そこでは、各地に叢生したサークル運動などに見るように、「人民」や「階級」、「国民」や「民族」という言葉で対象化されながらも「人びと」と社会を結びつける様々な実践が存在したことが掘り起こされつつある。冷戦体制の崩壊から四半世紀が過ぎ、社会主義の理論や運動についての客観的かつ自由な議論の場が開けたなかで、高度成長、そしてポスト高度成長の時代に忘却されてきた人びとの協働による対抗的な文化の創造に対する関心が現われてきたともいえるだろう。

美術もまた、こうした「50年代研究」の機運の例外ではない。報告でも、従来の戦後美術史の叙述では語られることのなかった50年代の絵画表現に焦点を当てたい。具体的には、日本美術会と日本アンデパンダン展の周辺作家たち—丸木位里・赤松俊子 (後年、丸木俊と改名) の「原爆の図」とその社会化、四國五郎の広島における街頭の文化活動、新海覚雄の内灘や砂川闘争の取材について紹介する。いずれも美術の「民主化」を掲げて、画壇や美術界を超えて時代と切り結びながらも、やがてその社会的な活動の実態とともに作品も忘却され (四國や新海)、あるいは作品の名前のみが巷間に流布していった (「原爆の図」)。最近では Socially Engaged Art といった関心から論じられることもあるようだが、報告では「記録」や社会運動としての側面に先立って、まずは作品そのものに注目する。その際、同じく50年代に発表された浜田知明の「初年兵哀歌シリーズ」を参照する。前述の美術家たちが、外部からの政治的な指導方針を意識しつつ、集団的な表現や共同制作への関心を示したのに対し、同時代にあって個としての体験と表現にこだわりつづけた作家のひとりが浜田である。

たとえば、共同性と個という視角を中心に据えながら、それぞれの表現の共通性と相違点を浮き上がらせ、さらには、リアリズムとシュルレアリスム、政治と美術、戦争体験といったいくつかの問題設定を構想してみるならば、50年代という時代に「絵を描く」ことがもった可能性について、そして歴史の連続と断絶についての新たな見方を示唆することができるかもしれない。なお、原爆の図をめぐる最近の内外の展覧会や、四國や新海の「発見」については、『美術運動』No. 144 に寄せた拙稿「50年代美術との新しい出会い—原爆の図、四國五郎、新海覚雄」を参照されたい。



新海覚雄「八十一才 清水」1955-56年



辻詩 1950年